

スポーツ文化の風を発信する

NITTAIDAI

ニッタイダイ 2005年 春



CONTENTS

特集1 ■写真でみる日体大の戦後60年史 — 1

特集2 ■箱根駅伝 — 7

16年ぶりの準優勝に輝き!!

INTERVIEW ●アスリートたち — 9

Active People ●社会の第一線で活躍するOB・OG — 11

大学院の紹介 ●3学系の最新ニュース&レポート — 13

NEWS ●04下半年ニュース — 15

News Eye ●04年「学生生活実態調査報告書」 — 17

クラブ情報 ●04年度下半期クラブの主な大会成績 — 18

INFORMATION ●dot.NITTAIDAI — 19

INFORMATION

dot.NITTAIDAI

〔NITTAIDAI(ニッタイダイ)〕

発行日 ●2005年4月1日

発行 ●日本体育大学 / 日本体育大学女子短期大学部

広報委員会 TEL 03-5706-0921

FAX 03-5706-0989

http://www.nittaidai.jp/

制作協力 ●(株)図書出版

「日本体育大学女子短期大学」は、平成17年4月5日日本体育大学に名称が変更されました。

■学年暦 (平成17年・2005年度上半期)

月	日(曜日)	行 事
4	3(日)	入学式 (横浜・健志台キャンパス) 新入生オリエンテーション (健康診断、スポーツテスト、学生証手続、履修申告、他) 在学生 健康診断、履修申告確認等 防災訓練及び就職対策等の行事 生活指導等 前学期授業開始 大学 養護実習 (健康学科養護コース4年) [5/14(土)まで] 介護等体験事前指導講習会 (短大体育科1年・その他) ※通常授業実施 (5/6)に振り替え)
	4(月)～9(土)	
	9(土) 11(月) 11(月)～ 16(土) ※29(金・祝)	
5～6	※5/2(月) ※5/6(金)	※自宅研修日 ※休業日 (4/29の振り替え)
	5/30(月)～6/25(土)	教育実習 (大学4年)、教育実習 (短大体育科2年) 教育実習2 (短大体育科2年 [6/6(月)～25(土)まで])
7	2(土)～5(火)	短大 キャンプ実習 (保育科2年) 大学 キャンプ指導実習 (体育・健康・武道学科3年) 大学 水泳指導実習:日赤水上安全法コース (体育学科3年) 大学 海浜実習 (1年) 短大 体験学習 (1年) 大学 ゴルフ理論・実習 (社会体育学科4年) 大学 マリンスポーツ理論・実習 (社会体育学科3年) 大学 ゴルフ指導実習 (体育学科2年) 第1・2回 (豊石) 短大 国際交流実習 (体育科生涯スポーツコース1年) 前学期定期試験期間 前学期授業終了 (試験を含む)
	6(木)～16(土)	
	3(日)～6(水)	
	3(日)～16(土)	
	4(月)～10(日)	
	5(火)～8(金)	
	8(金)～14(木)	
	10(日)～16(土)	
	※中旬	
	19(火)～23(土) 23(土)	
8	1(月)～	大学 看護臨床実習 (健康学科養護コース3年) [9/2(金)まで] 夏季休業 [10/2(日)まで] 大学 社会教育実習 (社会体育学科3年) [10/2(日)まで]
	1(月)～	
	1(月)～	
9	8/31(水)～9/10(土)	大学 キャンプ理論・実習 (社会体育学科2年) 開学記念日 大学 水泳指導実習:ダイビングコース (体育学科3年) 大学 ゴルフ指導実習 (体育学科2年) 第3回(菅平)
	20(火)	
	22(木)～10/1(土)	
	27(火)～30(金)	

注) 実習等の期間については、変更することがある。

■平成17年度新採用教員紹介



宮川八岐 (みやかわ やさき)
[大学:教授]
教養・教職科 教職教育 I
東洋大学文学部国文学科卒業



藤田圭一 (ふじた しゅいち)
[大学:教授]
教養・教職科 教職教育 II
日本大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得満期退学文学修士



船渡和男 (ふなと かずお)
[大学:教授]
体育学科
スポーツトレーニングセンター
東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学体育学修士 教育学修士



坂井 元 (さかい はじめ)
[短大:助教授]
保育科 保育科専門2
明治学院大学社会学部社会学博士課程卒業



河野徳良 (こうの とくよし)
[短大:講師]
体育科
スポーツトレーニングセンター
米国インディアナ州立大学大学院アスレティクストレーニング学修士課程修了
Master of Science



岩原文彦 (いわはら ふみひこ)
[大学:助手]
体育学科 体育研究所
日本体育大学大学院体育科学研究科博士後期課程修了
体育科学博士



小嶋新太 (こじま ありた)
[大学:助手]
武道学科 運動方法 (柔道)
日本体育大学大学院体育科学研究科博士前期課程修了
体育科学修士

■日本学生支援機構奨学生の募集について

日本学生支援機構奨学金の応募の機会を基本的に年に一度です。募集説明会の日時等は掲示で通知しますので、希望者は必ず確認をして、応募の機会を逃さないようにしてください。
なお、家計を支えている人の失業、死亡、不慮の事故、災害などによって家計が急変した場合は「緊急採用」「応急採用」がありますので、事情が生じたときには早急に東京・世田谷キャンパス学生課、横浜・健志台キャンパス教学局に相談をしてください。

■問い合わせ先 東京・世田谷キャンパス
学生課 03-5706-0904
横浜・健志台キャンパス
教学局 045-963-7900

■「紀要」電子化のお知らせ

紀要委員会では、本学の知的生産物と言える年2回刊行の「紀要」を広く発信していくために、紀要本文の電子化作業に着手します。今後刊行の最新号からは電子化の了解を確認して編集に当たりますが、順次バックナンバーに遡って電子化事業を展開する予定です。紀要委員会では、著作権上の扱いはこれまで通り「論文執筆者に帰属する」と確認し、「電子化の許諾」については、紀要委員会が包括的に了承されたものとして進めると決定しております。ご了承ください。

紀要委員会

【編集後記】 今回の特集1「戦後60年史」のクラブ戦績を見ていただきましたか?「水球21年間無敗の376連勝」「女子バレーの全日本13連勝」「箱根駅伝5連覇」等々、体歴にあってはそのまま日本体歴の歴史そのものもいえるでしょう。今回、ページ数の関係で一部の団体記録しか紹介できず非常に残念でした。他にも紹介したい記録、特に個人の記録についても驚くものたくさんあります。このような記録は日体大関係者の財産です。改めて別冊で紹介できる機会ができたら素晴らしいものになるだろうなと思いました。
今年の新入生の中にも、日本で、いや世界で大活躍するアスリートが今、この横浜・健志台キャンパスで日体大の伝統の空気をいっぱい吸い込んでいっているのでしょうか。新入生の皆さん、自らの目標に向かって授業にクラブ活動に貪欲な学生生活を邁ってください。

新制大学としての新たな出発

日体大の戦後は、1949年に専門学校から日本で最初の体育大学に昇格したことから始まった。以後、体育教員の養成を使命に、本館・体育館を完成させながら53年には短大を設置、発展への基礎を築いていく。また、日本が戦後初参加した体操世界選手権では竹本正男が金メダル第一号となった。



▲「第10回国体」開会式参加 (1955年、東京で開催)



▲「体育研究発表実演会」の初の地方開催(5日間) (1955年10月22日、北海道旭川市体育館)



▲「学友会誌」創刊号 (1955年3月3日発行)



▲「第2回朝日体操祭」での日体大生の演技 (1955年5月15日、明治神宮外苑競技場で開催)



▲「第2回体操祭東京大会」の参加記念プログラム



▲正門から見た日体大 (1955年頃の深沢キャンパス)



▲「第2回体育研究発表実演会」 (1955年9月18日、田園コロシアムで開催)

年表で見る60年の歩み (日体大のクラブ戦績は誌面の都合上、全日本大会を中心に抜粋掲載しました)

年号(昭和)	国内外の社会の動き
1945(20)	8月15日太平洋戦争終結
1946(21)	第1回国連総会/戦後初の総選挙
1947(22)	教育基本法・学校教育法(6・3・3・4制、男女共学)各公布/日本国憲法施行
1948(23)	新制大学12大学が発足/戦後初の五輪ロンドン大会開催、日本参加できず
1949(24)	湯川秀樹、ノーベル物理学賞授賞(日本人初)/新制大学で体育が正課に
1950(25)	短期大学発足/朝鮮戦争勃発
1951(26)	NHK第1回紅白歌合戦放送
1952(27)	オスロ冬季五輪/血のメーデー事件/ヘルシンキ五輪(日本戦後初参加)
1953(28)	テレビ放送開始(NHK、NTV)
1954(29)	電気冷蔵庫・洗濯機・掃除機が三種の神器/世界体操選手権(ローマ)に日本初参加、竹本正男・田中敬子優勝
1955(30)	ヘレン・ケラー来日/神武景気始まる
1956(31)	コルティナ・ダンペッツォ冬季五輪/メルボルン五輪
1957(32)	日本、国際連合に加盟
1958(33)	アジア大会(東京)/東京タワーが完工
1959(34)	皇太子殿下ご結婚/レコード大賞創設

年号(昭和)	日体大の主な歩み
1946(21)	4月 体育専門学校が土浦海軍航空隊跡に移転、入学式行方
1948(23)	3月 米本卯吉、理事長就任
1949(24)	4月 日本体育大学(体育学部体育学科)が開校
1951(26)	3月 日本体育大学が土浦から深沢へ全面復帰 7月 水泳実習を丸子多摩川で実施 11月 第60回体育祭を学内グラウンドで開催
1952(27)	4月 日本体育大学校章を「體大」と改める
1953(28)	4月 日本体育大学女子短期大学が開校 10月 体育館落成
1954(29)	9月 第1回体育研究発表実演会を東京都体育館で開催
1955(30)	3月 「日本体育大学学友会誌」創刊
1956(31)	7月 キャンプ実習を始める
1958(33)	5月 アジア大会(東京)の運営補助役員として1,814名が協力、エキシビジョンに出演
1959(34)	10月 第14回国体(東京)のマスゲームに1,200名出場

年号(昭和)	日体大のクラブ戦績
1947(22)	体操男子:全日本学生選手権優勝(体専)
1953(28)	ハンド男子:日体大関係チーム、全日本総合選手権優勝(S34まで7連覇) 体操女子:全日本総合選手権個人総合優勝(田中敬子)
1954(29)	バレー女子:第1回全日本大学選手権優勝 体操男子:全日本学生選手権優勝 体操女子:全日本選手権個人総合優勝(田中敬子)
1955(30)	体操男子:全日本選手権初優勝 体操女子:全日本選手権個人総合優勝(田中敬子) 体操男子:全日本学生選手権優勝
1956(31)	体操男子:全日本学生選手権優勝
1957(32)	バレー女子:全日本大学選手権優勝
1958(33)	ソフトテニス:全日本学生選手権女子ダブルス優勝(和田・畑中組) バレー女子:全日本大学選手権連覇 体操女子:全日本学生選手権優勝(個人総合:大草美智子)
1959(34)	バスケ女子:全日本学生選手権初優勝 バレー女子:全日本大学選手権3連覇 体操男女:全日本学生選手権優勝(個人総合:鶴見修治、大草美智子)

写真で見る

日体大の戦後60年史

専門学校から
体育・スポーツの
メッカとなるまでの歩み

1946年の終戦から今年には60年目に当たる。この60年間は、日本が廃墟の中から奇跡的な復興を遂げ、世界に冠たる経済大国に変貌を遂げてきた時代である。それは日体大にとっても、校舎・運動施設の大半を焼失された中から新制大学として出発し、学校体育・生涯スポーツ指導者の養成と多くのトップアスリート・金メダリストの輩出により、我が国体育界のメッカとなつた時代でもある。

今回の特集では、今に伝わるセピア色の写真を通して、戦後60年の日体大とそのスポーツの足跡を辿つてみた。日体大と、日体スポーツの60年は、日本スポーツ界の戦後60年の歩みでもあるのだから。特に、年表の「日体大のクラブ戦績」を辿つていただければ、体操競技(ハンドボール・バレー・バスケット・水球等々)、大学スポーツのあらゆる種目において、日体大がスポーツのメッカにふさわしい足跡を残してきていることが見えてくるに違いない。

<参考文献>昭和・平成現代史年表(小学館)、『年表昭和史』(岩波)、『midas96-04』(集英社)、『近代日本の体育-スポーツ史の原風景』(日本体育大学)、『忘れられぬ日』(日本体育大学同窓会)、『文芸春秋』にみるスポーツ昭和史・第3巻(文春)、『日本アマチュアスポーツ年表』(ハースト・マガジン社)

大学スポーツの覇者として躍進

東京五輪を境に大学スポーツの強化に本格的に乗り出した日体大では運動部が大きく躍進し、大学スポーツ界の豪強に躍り出た。69年頃から各スポーツ種目で次々とインカレを制するようになり、70年ユニバーシアード大会、74年アジア大会以来、出場選手数でもトップの座をほぼ守り続けている。



▲米本卯吉理事長逝去を報じる「エッササ時報」(同窓会報)(1974年)※創刊は73・12・10



▲ラグビー部 富士鉄釜石を破り、初の全日本王座(1970年1月15日 秩父宮ラグビー場)



▲金メダルに輝く塚原光男の鉄棒(1976年モントリオール五輪)



▲創立八十周年記念の学園祭開催(1972年11月1～5日)



▲第46回箱根駅伝、完全総合優勝(連覇)(1970年1月1～2日)



▲健志台グラウンドの航空写真(1971年8月、第2期建設工事完了の頃)

年表で見る60年の歩み (日体大のクラブ戦績は誌面の都合上、全日本大会を中心に抜粋掲載しました)

年号(昭和)	国内外の社会の動き
1970(45)	万博開催(大阪)／日航機「よど号」ハイジャック事件／歩行者天国始まる
1971(46)	マクドナルド日本1号店開店／環境庁設置／ラジオの深夜放送人気
1972(47)	札幌冬季五輪／沖縄返還／ミュンヘン五輪／日中国交正常化
1973(48)	日航機ハイジャック事件／石油危機、消費者バニック／物価急上昇
1974(49)	田中金権への批判強まる／長嶋茂雄(巨人)現役を引退／超能力ブーム
1975(50)	ベトナム戦争終結／エリザベス女王来日／沖縄海洋博開催／赤ヘルブーム
1976(51)	インスブルック冬季五輪／ロッキード事件／モントリオール五輪／戦後生まれ、総人口の半数を超える
1977(52)	日本赤軍による日航機ハイジャック事件／王選手本塁打756号達成
1978(53)	成田空港開港／英国で試験管ベビー誕生／日中平和友好条約調印／米中国交正常化／ディスコブーム
1979(54)	東名日本坂トンネル事故／第1回東京女子国際マラソン

年号(昭和)	日体大の主な歩み
1971(46)	4月 専攻科開設／「日本体育大学紀要」創刊
	7月 深沢に1号館完成
	8月 健志台グラウンド開き
	11月 学生食堂開業
1972(47)	11月 創立八十周年記念式典を5号館で挙行
1973(48)	3月 清水正一、学長に選任
	12月 「日本体育会・日本体育大学八十年史」刊行
1974(49)	7月 故米本卯吉理事長の日本体育会葬行われる
	9月 米本正、理事長に就任
1975(50)	4月 社会体育学科開設／大学院体育学研究科(修士課程)開設
1977(52)	4月 健志台学生寮開設／健志台プール落成式挙行
	8月 俱知安校舎落成式挙行
1978(53)	3月 健志台合宿寮落成式挙行
1979(54)	3月 岡田俊彦、学長に選任
	4月 健志台教学局開設(健志台での本格的な授業開始)

年号(昭和)	日体大のクラブ戦績
1970(45)	駅伝男子:箱根駅伝往復完全優勝 ラグビー部:富士鉄釜石破り全日本初王座 ハンド男女:全日本学生選手権アベック優勝(2度目)
1971(46)	陸上女子:全日本学生選手権連覇
1972(47)	飛込女子:日本学生選手権飛板・高飛優勝
1974(49)	水球男子:日本学生選手権初優勝 ハンド女子:全日本学生選手権5連覇
1975(50)	サッカー男子:全日本学生選手権初優勝
1976(51)	体操女子:全日本学生選手権優勝 ソフトテニス:全日本学生選手権優勝
1977(52)	ソフト男女:全日本学生選手権アベック優勝 体操女子:全日本学生選手権優勝
1978(53)	競泳女子:日本学生選手権連覇 ラグビー男子:全日本学生選手権優勝
1979(54)	カヌー男子:全日本学生選手権優勝 剣道女子:全日本学生選手権優勝(左座陸美) スケート女子:日本学生選手権対校優勝 バスケット女子:全日本学生選手権優勝(11度目) バドミントン女子:全日本学生選手権優勝(8度目) ハンド男子:全日本学生選手権優勝(8度目)

東京五輪を機にスポーツ大学へ脱皮

1964年の東京五輪は、日体大が体育大学からスポーツの総合大学へと脱皮を図っていく上で大きな転換点となった。健康学科・体育研究所・武道学科を開設するとともに、運動施設の拡充と整備を図りながら、トップアスリートの育成にも重点を置くようになる。



▲全メダルに輝く花原勉の押さえ込み(1964年東京五輪、レスリングG.フライ級)



▲開会式で日体大生がマスケーム(1967年8月27日ユニバーシアード東京大会)



▲銀メダルに輝く鶴見修治の鞍馬(1964年東京五輪)



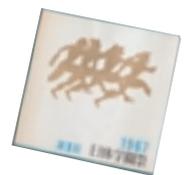
▲千葉吟子の平均台の上での跳躍(1964年東京五輪)



▲銅メダルに輝く日本女子チーム(1964年東京五輪、体操表彰式)



▲「トレーニングセンター」内部(1965年完成)



▲第1回日体学園祭のパフレット(1967年9月20～24日開催。統一テーマは、「友情の礎石の上に体育の礎を築こう」)

年表で見る60年の歩み (日体大のクラブ戦績は誌面の都合上、全日本大会を中心に抜粋掲載しました)

年号(昭和)	国内外の社会の動き
1960(35)	スコーパレー冬季五輪／チリ沖地震で津波被害／安保闘争高揚／ローマ五輪
1961(36)	世界初の有人宇宙船／所得倍増計画
1962(37)	堀江謙一世界初単独太平洋横断成功／キューバ危機／東京でスモッグ続く
1963(38)	ケネディ大統領暗殺／力道山死去／教科書無償配布開始／ボウリング人気
1964(39)	インスブルック冬季五輪／新潟大地震／東海道新幹線開業／東京五輪
1965(40)	米、ベトナム戦争に直接介入／日韓条約調印／中国で文化大革命始まる
1966(41)	人口1億人突破／ビートルズ来日／3Cが新三種の神器／初めての「体育の日」
1967(42)	女子の雇用が1千万人超す／ミニスカート大流行／ユニバーシアード東京大会
1968(43)	グルノーブル冬季五輪／大学紛争始まる／メキシコ五輪／三億円事件発生／日本GNP世界第2位／露・間ビル完成
1969(44)	東名高速道路全通／アポロ11号、人類初の月面着陸／反体制フォーク流行

年号(昭和)	日体大の主な歩み
1960(35)	4月 日体保育科を開設
1962(37)	4月 健康学科開設
	4月 体育研究所が研究活動を開始
1963(38)	4月 短大・保育科開設
1964(39)	9月 5号館(第1体育館)完成／5・6号館、東京五輪バレーボール練習会場となる
	10月 東京五輪大会運営に補助役員1,800名が協力
	11月 パラリンピック(東京)大会運営に補助役員100名が協力
1965(40)	4月 武道学科開設
	6月 スポーツ・トレーニング研究所完成
1966(41)	4月 新入生オリエンテーション・特別教育活動始める
1967(42)	4月 スポーツテストを始める
	8月 ユニバーシアード東京大会運営に1,800名が協力、マスケームに1,500名参加
	9月 第1回国祭を開催(20日～24日)

年号(昭和)	日体大のクラブ戦績
1961(36)	体操女子:全日本選手権初優勝
1962(37)	体操女子:全日本選手権連覇
1964(39)	体操男子:全日本学生選手権アベック初優勝 ソフトテニス女子:全日本大学対抗初優勝 バドミントン女子:全日本学生選手権初優勝
1965(40)	ハンド女子:第1回全日本学生選手権優勝
1966(41)	ソフト男女:全日本大学選手権アベック初優勝
1967(42)	ソフト男女:全日本大学選手権アベック連覇
1968(43)	ハンド男女:全日本学生選手権アベック初優勝 ソフト男子:全日本大学選手権3連覇
1969(44)	陸上:箱根駅伝初優勝 飛込男子:日本選手権飛板・高飛優勝／女子飛板優勝 バレー女子:全日本大学選手権優勝(13連覇)／体操男子:アベック優勝(全日本選手権初)／全日本学生選手権4度目 バスケット男子:全日本学生選手権アベック初優勝 ソフト女子:全日本大学選手権優勝(3度目)

新しい時代の新しい大学へ

~21世紀創造型大学をめざして~

次世代を担う体育・スポーツの専門大学として「21世紀創造型大学」を目指し、1996年「Fu21（フューチャー・ユニバーシティ21）」構想を発表。「大学院博士課程」「スポーツ局」の開設と、21世紀のビジョンを着実に具体化している。



▲大学院にMRI装置導入（1997年9月）



▲シドニー五輪壮行会（2000年6月28日）



▲大学院博士第一号誕生（4名）
（2001年3月）



▲広報誌「NITTAIDAI」創刊
（2000年11月20日）



▲「北島康介君世界新記録樹立を祝う会」開催（2003年10月10日）



▲スポーツ局開設の案内パンフ
（1998年10月10日）



▲資料「Fu21~21世紀創造型
大学をめざして」
（1996年7月、学長諮問機関・近
未来構想協議会が刊行）



▲「キャンパス内全面禁煙」の
実施告知ポスター
（2004年1月）

世界的トップアスリートの輩出

体育・スポーツのメッカを目指して建設された横浜・健志台キャンパスは、92年までに米本記念体育館や百年記念館等の諸施設が完成。トップアスリートの育成策も実り、84年のロス（38名）以降、ソウル、バルセロナ、アトランタまで毎回25名を超える選手が五輪に出場している。



▲「体育・スポーツ国際会議」の会議シーン
（1985年9月1~3日、日体大主催、横浜）



▲深沢屋内プールの落成式
（1984年9月14日）



▲ロサンゼルス五輪出場
選手報告会
（1984年9月17日）



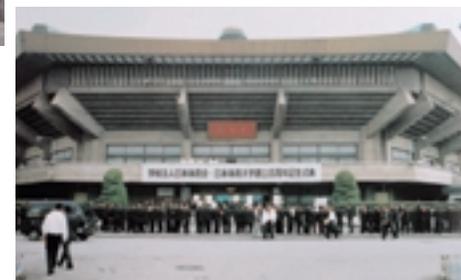
▲「NITTAI FESTIVAL」開催
（1990年11月1~3日）



▲バルセロナ五輪出場者の垂幕（1992年開催、日体大の出場選手25名）



▲「JOAセッション」のプログラム
（1994年11月3日健志台キャンパスで開催）



▲創立百周年記念式典挙行（1991年10月28日、於武道館）



▲ヨーロッパ研修旅行
（1986年、ドイツ体育大学ケルンなど
各国の体育・スポーツ機関を訪問、
欧州のスポーツ事情や文化を研修）

年表で見る60年の歩み（日体大のクラブ戦績は誌面の都合上、全日本大会を中心に抜粋掲載しました）

年号(平成)	国内外の社会の動き
1995(07)	阪神淡路大地震/地下鉄サリン事件/ユニバーシアード福岡大会/衆院「戦後50年国会決議」
1996(08)	エース薬害問題/アトランタ五輪/携帯電話急増
1997(09)	ダイアナ、パリで交通事故死/消費税5%に引き上げ
1998(10)	長野冬季五輪/サッカーW杯日本初出場
1999(11)	国旗・国歌法成立/東海村核燃料工場臨界事故
2000(12)	三宅島噴火、全島避難/シドニー五輪
2001(13)	国内初の狂牛病/米同時多発テロ/米軍アフガニスタン攻撃
2002(14)	ソルトレークシティ冬季五輪/サッカーW杯日韓共同開催/釜山アジア大会
2003(15)	北朝鮮NPT脱退/米軍、イラク侵攻。フセイン体制崩壊/健康増進法施行
2004(16)	アテネ五輪/ロシアで学校占拠、犠牲500人以上/スマトラ沖地震
2005(17)	愛知万博

年号(平成)	日体大の主な歩み
1996(08) 4月	大学の英文表記をNIPPON SPORT SCIENCE UNIVERSITY (略:N.S.S.U.)に変更
7月	「Fu21-21世紀創造型大学をめざして」刊行
1997(09) 9月	MRI装置を6号館に設置
1998(10) 4月	尾尾武夫、学長就任/大学院博士(前期・後期)課程開設
10月	スポーツ局開設
2001(13) 3月	大学院博士第一号誕生(4名)
4月	長谷川正明、学長就任
2002(14) 1月	深沢校舎グラウンド、フィールドターフに改修
2月	名誉博士称号授与式(第1号)モンゴル、国、サンジバグジン・トゥムルオチル国家大会議議長閣下
2003(15) 2月	名誉博士称号授与式(第2号)慶応大 学長、趙永植学園長
2004(16) 4月	キャンパス構内全面禁煙実施
9月	健志台に体操競技館落成
2005(17) 3月	健志台キャンパス、ブルートラックに改修

年号(平成)	日体大のクラブ戦績
1995(07)	水球男子:74年以来21年間無敗376連勝でストップ
1997(09)	トランポリン男女:全日本学生選手権Aベックで連覇
2000(12)	少林寺男女:全日本学生選手権濱武優勝3連覇
2001(13)	軟式野球男子:全日本大学選手権5連覇 ゴルフ男子:朝日杯全日本学生選手権連覇
2002(14)	トライアスロン女子:日本学生選手権優勝
2003(15)	競泳女子:日本学生選手権学校対抗6連覇 ソフトテニス女子:全日本王座優勝(9年度) ソフト男子:全日本大学選手権優勝(4年連続26度目) 軟式野球女子:全日本大学選手権(8年度) フェンシング女子:全日本学生選手権フルレ優勝(5年度)
2004(16)	アーチェリー女子:全日本学生王座優勝 テニス男子:日本選手権優勝 ライフ男子:全日本LS室内選手権優勝(16連覇) サッカー女子:全日本大学選手権優勝(5年連続11年度目)

年表で見る60年の歩み（日体大のクラブ戦績は誌面の都合上、全日本大会を中心に抜粋掲載しました）

年号(昭和/平成)	国内外の社会の動き
1980(55)	レークブラッド冬季五輪/モスクワ五輪開催(日本不参加)/王貞治選手現役引退
1981(56)	臨調発足/神戸で「ポートピア」開幕
1982(57)	東北・上越新幹線開業
1983(58)	東京ディズニーランド開園/「おしん」ブーム
1984(59)	サラエボ冬季五輪/ロサンゼルス五輪/グリコ・森永事件発生
1985(60)	つくば科学博開幕/日航ジャンボ機墜落/阪神優勝/ファミコンブーム
1986(61)	「男女雇用機会均等法」施行/チェルノブイリ原発事故/三原山大噴火
1987(62)	昭和三皇崩御、平成と改元/消費税スタート/ベルリンの壁崩壊
1988(63)	カルガリー冬季五輪/瀬戸大橋開通/ソウル五輪
1989(元)	昭和天皇崩御、平成と改元/消費税スタート/ベルリンの壁崩壊
1990(02)	イラク軍、クウェート侵攻/東西ドイツが統一/バブル崩壊/センター試験開始
1991(03)	湾岸戦争勃発/雲仙・普賢岳で火砕流/ソ連崩壊
1992(04)	アルベールビル冬季五輪/バルセロナ五輪
1993(05)	皇太子ご成婚/サッカーJリーグ開幕
1994(06)	リレハンメル冬季五輪

年号(昭和/平成)	日体大の主な歩み
1980(55) 6月	健志台グラウンド「健志台誌碑」除幕式挙行
1981(56) 1月	「日本(にほん)体育大学から「日本(にっぽん)体育大学へ呼称変更」
1982(57) 4月	岩間英太郎、学長選任
1984(59) 9月	深沢屋内プール及びトレーニングルーム落成式挙行
1985(60) 9月	「体育・スポーツ国際会議」開催(横浜)
1987(62) 4月	深沢図書館(独立2階建)新規開館
1989(元) 2月	稲垣安二、学長選任
1990(02) 8月	健志台キャンパス百年記念館地鎮祭挙行
1991(03) 3月	深沢校舎11号館(学生部・学生ホール)完成
10月	創立百周年記念式典挙行(於日本武道館)
1992(04) 2月	綿井永寿、学長選任
5月	学長諮問機関、近未来構想協議会設置
1993(05) 7月	自己点検・評価委員会を設置
1994(06) 11月	「JOA(日本オリンピックアカデミー)セッション」を健志台で開催

年号(昭和/平成)	日体大のクラブ戦績
1980(55)	野球:明治神宮大会初優勝、首都10年ぶり/ウエイト男子:全日本大学対抗優勝
1981(56)	サッカー男子:全国大学選手権優勝(2年度)
1982(57)	バドミントン男子:全日本学生選手権Aベック連覇
1983(58)	スケート女子:日本学生選手権総合独占
1984(59)	ソフト男子:全日本大学選手権3連覇
1985(60)	アーチェリー男子:全日本学生個人選手権4年連続優勝(山本博)
1986(61)	レスリング:全日本学生王座団体優勝
1987(62)	相撲:全国学生選手権優勝
1988(63)	相撲:全日本大学選手権団体3連覇
1989(元)	ソフト男子:全日本選手権優勝(3年度)
1990(02)	ハンド男女:全日本学生選手権Aベック優勝(6年度)
1991(03)	飛込女子:日本学生選手権飛板・高飛優勝 フェンシング:全日本学生選手権(男サバール・エペ)優勝
1992(04)	サッカー女子:全日本大学選手権初代優勝 ハンド女子:全日本学生選手権優勝(15年度)
1993(05)	バレー女子:全日本大学選手権優勝(27年度)
1994(06)	水球男子:日本学生選手権優勝(20年度)

日体大、16年ぶりの 準優勝に輝く!!

～駅伝の名門校復活への手応えをつかむ～



6区/末吉



7区/後藤



8区/弘



9区/岩崎



10区/山田



2区/熊本

◆第81回東京箱根間往復大学駅伝競走・日体大総合成績◆

区間	距離	選手名	学年	出身校	記録	区間順位	通過順位
1区	21.4km	鷺見 知彦②	愛知	豊川工業	1'03'06"	3	3
2区	23.2km	熊本 剛③	兵庫	西脇工業	1'09'16"	6	4
3区	21.5km	保科 光作②	富山	東北	1'05'04"	6	3
4区	21.0km	稲垣 晃二②	兵庫	西脇工業	1'04'47"	11	4
5区	20.9km	北村 聡①	兵庫	西脇工業	1'13'28"	4	5
往路 成績 (108.0km) 5'35'41"							5位
6区	20.8km	末吉 敏③	群馬	豊後高専	1'00'30"	8	5
7区	21.3km	後藤 宣広④	愛知	豊川工業	1'04'40"	3	4
8区	21.5km	弘 潤一④	山口	西京	1'06'23"	6	5
9区	23.2km	岩崎 義也③	熊本	千原台	1'11'04"	12	4
⑩10区	23.1km	山田 統之④	愛知	豊川工業	1'09'05"	1	2
復路 成績 (109.9km) 5'31'42"							3位
総合 成績 (217.9km) 11'07'23"							2位

◆10区 区間賞 区間新記録

◆総合成績◆

①	駒 大	11時間3分48秒
②	日 体	11:07:23
③	日 体	11:07:48
④	中 大	11:07:49
⑤	順 大	11:10:32
⑥	東 海	11:11:40
⑦	東 海	11:13:53
⑧	法 大	11:14:35
⑨	中央学院大	11:14:49
⑩	神奈川大	11:15:11
⑪	早 大	11:17:23
⑫	東 大	11:18:45
⑬	山梨学院大	11:20:58
⑭	城 大	11:22:49
⑮	帝 京	11:25:03
⑯	専 大	11:25:14
⑰	明 大	11:28:23
⑱	拓 大	11:35:08

<オープン参加>
▽関東学連選抜 11:26:38

◆箱根駅伝4連覇以上のチーム◆

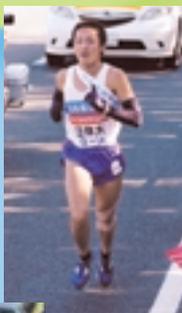
大学	期 間	連覇数
中 大	1959～64年	6連覇
日体大	1969～73年	5連覇
日 大	1935～39年	4連覇
順 大	1986～89年	4連覇
駒 大	2002～05年	4連覇



5区/北村



4区/稲垣



3区/保科



1区/鷺見 (右から3人目)

箱根駅伝

特集2



北村 聡
体育学科2年 (兵庫県立西脇工業高等学校出身)



別府健至 監督

「箱根のアクシデントはいろいろあるけど、あまり思い出したくないですね。レースでもそこまではバックになった経験はありません。人の姿も見えなくなるくらいでした。レース後は自分の準備不足を強く感じました。ただ、もう二度と同じこと

は繰り返さないと思います。あの悔しい経験を今後の陸上競技生活に活かしていければと思っています。箱根はやはり普通の駅伝とは違うなと感じました。沿道の声援の多さも含めて独特の雰囲気でした。レース中の駆け引きもトラックレースに比べると断然難しいですね。大学生活も一年が過ぎようとしています。高校時代と比べると自己管理の難しさを強く感じます。周囲は箱根のリベンジのことを話題にされますけど、それだけを考えてのじゃなく個人のレベルアップを目指します。」

「2位という結果は前年の9位に比べれば躍進とも言えますが、まだ上がるといこうとでは負けてから、もちろん満足はしていません。ただ、大会前に故障者が数名出たので、チームにはよく走れたのではないかなとも思います。非常にチーム全体がレベルアップしてきたという実感がありません。」

選手たちは2位という結果に「俺たちでもやれる」という自信が持てたのではないのでしょうか。自信を持つということは日頃の練習へのモチベーションも高めます。その自信を今シーズンは消さないように各レースで結果を出し続けたいと思います。箱根は走れるのは10人ですが、60人以上の部員全員の気持ちを一丸とにしたいですね。チームの意思統一が図られていないと、意欲統一が図られていない選手にも影響が出ます。その意味ではチームを影で支えてくれた、マネージャーら多くのスタッフには感謝しています。」

箱根駅伝は最大にして最高の大会ですから、やはり今シーズンの最大の目標もそこになると思います。ただ、まずは個々のレベルアップを図ることが大前提になります。今年はユニバーシアードや世界クロスカントリー選手権など大きな大会がありますから、そこを一人でも多くの部員を送り込みたいですね。私たちが好成績を挙げることで、多くの日本大を応援していただくといいと思います。今年は優勝を意識ですか？いや、6年前に就任した時からそれだけを意識しています(笑)。」

選手に自信を植え付けた大会。ただ2位で満足してはいけない。

どこにも負けない一体感“VORTEX（旋風）”が日体を元気にする！



[チアリーダー部]

芳村 さゆり

(体育学科4年)

ここ数年は競技スポーツとしても国内外で注目を集め、急速に競技人口を増やし続けるチアリーディング。常に笑顔と絶やさぬ華やかな演技は見る者に元気を与える。昨年、9年ぶりにJAPAN CUPで日本一に輝いたチアリーディング部“VORTEX”主将の芳村さんに、チアリーディングの魅力語ってもらった。

—チアリーディングを始めた時期ときっかけを教えてください。

芳村 ●高校生の時からです。文化祭での先輩たちの演技を見てかっこいいなと思ったことで、始めたばかりの頃は演技中の笑顔もひきつっていました。チーム全員で演技を作り上げていくところに感動があります。あの感動を多くの後輩が味わってくれていると思っています。

—進学先に日体大を選んだ理由は？

芳村 ●高校時代の先生が日体大出身で、勧められたことが大きかったです。それと実際に学校見学に来てその雰囲気や良さに惹かれました。今は授業で多くの体育実技を学ぶことがとても刺激になります。また他の部活の人たちと色々な意見を交わすことも自分にとってとても有意義な時間です。だから、ついつい部活がオフの日も学校に来てしまいます。学校が好きなんです(笑)。

—主将に任命されて心境の変化はありましたか？

芳村 ●今年の箱根駅伝の後に先輩方から指名を受けたのですが、その時はビックリしました。とにかく自分の生活面からしっかりするのはいけないと思うようになりました。それと下級生の一人ひとりをケアする立場ですから、これまで以上に、練習中に部員たちの様子を見るようになりました。

—チアリーダー部に入って特に良かったと思うことを教えてください。

芳村 ●実演会などで地方で演技を出来たことは貴重な経験ですね。日本だけでなく、昨年は招待されて香港遠征も経験しました。色々なところで日体大の素晴らしさをアピールする機会を与えていただいています。

—毎日の練習が辛くなる時もあるかと思いますが、

芳村 ●そうですね…。正直に言えば一年生の頃は練習が厳しくてそう感じたこともありました。が、同学年の部員たちと励まされ合ったりすることで乗り切りました。今は「続けて良かった」と心から思います。

—チアリーディングの難しさはどのあたりにありますか？

芳村 ●当たり前なんです。全員の演技のタイミングをそろえることです。タイミングは演技者それぞれの気持ちと連動していて、少しでも気持ちにずれがあるとすべてがバラバラになってしまいます。(演技時間の)2分30秒はあっという間に過ぎてしまうので、一度崩れたリズムを取り戻すことは簡単ではないですね。

—練習内容で工夫していることはありますか？

芳村 ●4年生全員で練習後のミーティングで翌日のメニューを決めています。練習内容がマンネリになって、雰囲気が落ちこまないように常に新鮮なメニューを取り入れて部員たちのモチベーションを高めています。実際に演技する時の曲、構成もすべて自分たちで考えているので、とてもやりがいを感じます。

—今年のチアリーダー部の目標を教えてください。

芳村 ●昨年はJAPAN CUPで優勝しましたが、今年ほどの大会で何位を目指すという目標は特に置いていません。常に日体大チアリーディング部として高いレベルの演技を追求していこうと部員たちには伝えています。学内の中心的な部活となって日体大全体を元気にリードするようなチームにしていきたいですね。そうすれば自然とチーム全体のレベルも高くなると思います。

—最後に将来の目標を教えてください。

芳村 ●教員を目指しています。チアリーダー部の今と一緒になんです。厳しさと優しさをしっかりもった教員になりたいですね。チアリーディング自体は社会人クラブに入って続けようかどうか、悩んでいるところですね。まだ先の話ですけどね(笑)。

PROFILE ●よむら・さゆり

1983年生まれ
 神奈川県立外語短期大学付属高校出身。
 昨年のJAPAN CUPチアリーディング日本選手権大会優勝メンバー、部員32名(16年度末)を優勝、時には厳しくリードしている。現在の楽しみは5月に行う予定の、母校での教育実習。
 チーム名のVORTEXとは旋風の意味。

(2005.2.25 東京・世田谷キャンパスにて) 本紙表紙を飾る



「目標は昨日よりも上手くなること」日々の積み重ねが世界への道を近づける

[バドミントン部]

古財 和輝

(体育学科2年)

世界トップレベルの選手のスマッシュは時速300kmを超えるといわれるバドミントン。高さ約1.5mのネットをはさんでの攻防では技術はもちろん、相手との心理戦に打ち克つ強い精神力が求められる。世界のトップを目指し、連日ハードな練習を続ける古財君に競技の魅力聞いた。

—入学して1年が経過しましたが、ここまでの大学生活はいかがでしたか？

古財 ●日体大進学は高校の時から考えていました。初めての寮生活などで最初は慣れない部分もあり、バドミントンに集中できない時期もありました。ただ、今はもう大学のレベルにも慣れましたし競技に集中できています。環境も含めて自分の選択が正解だったなと思っています。授業では「心理学」などは競技の上でも参考になっていますね。

—バドミントンを始めたきっかけを教えてください。

古財 ●地元の熊本ではバドミントンが非常に盛んで、姉の影響もあり、気が付いたら始めていたという感じでしょうか。初めてラケットを握ったのは小学校3年生の時ですね。それ以来、バドミントン一筋です(笑)。

—競技を辞めようと思ったことはありませんか？

古財 ●ありません。常に強い相手が周りにいたこともあって、自分よりも上がいるうちは辞められないと思っているうちに、ここまで来ました。だからこの先もよほどのことがない限り辞めようとは思わないはず。

—高3の時には全日本ジュニアシングルスで優勝、日本一になりましたね。

古財 ●周囲からは「日本一」とよく言われますが、まだまだ海外の選手との対戦など強い刺激がありますから、実感というよりは先の目標が見えてきたという感じですね。次の目標はインカレの優勝です。

—海外遠征も積極的に行くそうですね。

古財 ●そうですね。基本的には一人で武者修行的に韓国など海外の大学へ練習に行きます。旅の手配などからすべて自分で行きます。知らない場所で言葉も分からない不安もありますが、精神面を鍛えるという意味では最高の経験となっています。

—戸惑うことはないですか？

古財 ●いや、競技のルールは同じですから。言葉が分からなくてもジェスチャーとかで何とか理解できますからね。ただ、高校の時などに比べると確実に気持ちさがタフになっていると思います。試合のときのプレッシャーはほとんど感じなくなりました。厳しい練習をクリアできているという自信が試合中の落ち着きに繋がっていると思います。

—19歳とは思えない経験をしていますね。

古財 ●もちろん競技を続けている以上は日本レベルで終わりたいと思っています。ただ、「世界を目指します」とは簡単に言えるかもしれないけど、日々の練習があるからなれば無理な話です。そのためにも色々な厳しい経験はしておかなくてはと思います。

—「世界」といえばオリンピックになると思いますが。

古財 ●そうですね。世界最高の大会ですからね。でもそこ到達するには毎日の積み重ねが基本ですから。毎日悩んで、それを解決しての繰り返しだと思っています。強さは簡単に身に付くものではないですから。常にモットーは「昨日よりも上手くなる」ですね。

(2005.03.11横浜・健志台キャンパスにて)



PROFILE ●こざい・かずてる

1986年生まれ
 熊本県熊本学園大学付属高校出身。
 高3時に全日本ジュニアシングルスで優勝。
 大学入学後の主な成績は全日本学生選手権シングルス5位、団体銀優勝。
 今年の箱根駅伝5区を走った陸上競技部北村聡君とは同じクラスで親友。

健康志向の高い中高年を中心に需要の拡大が見込まれる“フィットネス産業”。それぞれの企業にそれぞれの特徴があり、様々なプログラムやサービスを提供し、施設やネットワークの充実に努めている。

「ティップネスは1986年創立で、現在、全国34店舗で展開しています。サントリー系の企業のため、自由な社風で“やってみなはれ”・“やらせてみなはれ”という伝統とマネジメント重視の方針が受け継がれています。中期計画では、店舗を拡大し2010年には業界第2位になる目標を掲げています」。

在学中は、自宅のある千葉県の柏から約2時間の通学時間を苦にもせず、授業終了後、夜6時から10時過ぎまで「ティップネス渋谷店」でアルバイトをしていたという。「2年生の夏から、この業界を目指すなら学生時代からアルバイトをして、現場の様子を理解しておいた方がよいとのアドバイスを先輩から受け、渋谷店でエクササイズスタッフとして働きました」。

4年次の就職活動では営業職などを志望し、数社の内定も受けたが、これからは正社員としてマネジメントを本格的に行っていたいとの願望が強く、ティップネスに入社。船橋店、国領店で現場におけるマネジメントを学び、人事グループへ。主な仕事は新卒採用という重要なポジションで活躍している。「社員は360名ほどで、本年度は30名募集しました。ところがそこへ7,000名もの応募者が殺到しました」。なんと競争率は200倍以上の狭き門。松本さんは具体的にどのように対応したのだろうか。

「採用活動は、教育だと思っています。就職セミナーで種をまいて、育ててきたものを一次選考で摘み取って、次に“この肥料もあるよ”ときっかけを作る。そこで先輩に話を聞いたり調べたりしてレベルアップしてきた学生を二次選考で摘み取る。選ぼうというよりは、一次選考、二次選考で成長したかな、三次選考までにどんな風に変わったかな、と待っています。つまりは、志望者が自分で考えて行動することに期待しています」。

就職活動をする、志望者が「待っている」受身のスタンスになりがちだが、それではその他大勢に埋もれてしまう。言われたことに対して、その裏には「何かあるのか?」を自分で考えてアクションを起こすことが求められている。

「日体大生という“まじめで純粋なイメージ”。これは人事スタッフの誰もが抱いているもので、就職には非常に有利です。これに何をプラスしていくかが鍵を握ります。後輩が入ってくると、それは何より嬉しいものです。がんばってください!」。

この関門を潜り抜け採用された先輩が、今年もひとりティップネスに入社したそうだ。こうした先輩達に「何をプラスしたか」を聞いてみるのも、難関突破の大きなヒントになるだろう。

(3月11日、株式会社ティップネス本社にて取材)

PROFILE ●まつもと・かよ●

1977年千葉県生まれ
中学・高校時代にはソフトテニス部に所属(全日本ジュニア2位入賞、県大会優勝)。在学中に保健体育と養護の教員免許状を取得。サークル活動では生涯スポーツ「タッチラグビー」に創設時より所属。もともとは教員志望で、生徒たちにクラブ活動を通じて心のケアなども指導していきたいとの願望があったが、社会人として経験を積んでからでも遅いとはないと判断。入社5年目で2店舗での実践的なマネジメントを習得した後に、現在人事グループ所属の採用能力開発チームのスタッフとして活躍している。

日体大生という“まじめで純粋なイメージ”。これに何かをプラスしていけば、将来の道は必ず拓ける。



松本 佳世さん

株式会社ティップネス
人事グループ
(1999年3月健康学科卒業)



山道 良生さん

株式会社マクロース代表取締役
(1992年3月健康学科卒業)



人体標本を通して「人間とは」「身体とは」「健康とは」を実感してください。

日体大生が生理学や解剖学の授業で人体の模型やイラストを見ることがあっても、多くの人は生の人体標本を見る機会はまじらないだろう。解剖学という専門分野でしか知り得なかったこの人体解剖標本を、東京国際フォーラムで開催されていた(04年9月1日~05年2月28日)「人体の不思議展」で見る機会を得た。最初は余りのリアルさに緊張するが、人体の骨格からはじまって頭蓋骨、関節、筋、臓器など、180点近い標本を見ているうちに、自分自身の身体はこういう風になっているのか!と人体の構造と巧妙な仕組みに感動に近い感覚さえ覚えてくる。

「従来のホルマリン漬けの標本では不可能だった展示を可能にしたのは、“プラストミック”という新技術」だと、この展示会を企画・運営されている山道良生さんが教えてくれた。この技術により、「匂いがなく、弾力性に富んで、直に触れて観察でき、常温でも半永久的に保存できるようになった」とは言え、日本での人体標本はあくまで研究目的のため、「今回の標本は、全て中国で人体登録された人」だということ。そうした人体に対する日本人の感覚や文化の違いから、96年にドイツの標本で初めて展示した当時は、「来場してくれるか未だ未知数」だったらしい。しかし、身体への健康意識が高まる中、人体標本への拒否感はなく、むしろ好評を博し、「03~04年の東京展では75万人もの人が来場」している。そして、意外にも学生よりも社会人、特に若い女性の来場が多いとのこと。「女性の方が命や健康・美容への関心が強いかからでしょうね」。

山道さんは、大学時代からこうしたイベントの企画・運営に興味があったのだろうか?「ラグビー選手として大学で自分の力量が通用するか見定める道もありましたが、逆に選手をケアし、支える側をやりたいと思い、将来、海外でのトレーナー資格の取得を目指し健康学科に入学したのです」。しかし、「20歳から始めたアルバイト先で店を任せられ、仕事の面白さにのめり込んでいくうちに、道がそれて行きました」とは言え、「日体大で運動生理学などを学んだからこそ、違和感なくこの仕事に入れた」とも語る。

山道さんの大きな目標は、「人々が自分の身体にもっと興味を持てるような機会をつくること」。そんな遠大な夢に向かって邁進している山道さんは、「介護・余暇スポーツなど、今まで考えられなかった分野に日体大生も進出しています。だから、日体大で学んだことを生かす道は、スポーツクラブやアスリートだけでなく、もっと広いと認識してください。自分で考えている以上にもっと多くの業種があります。私も固定観念に囚われていたら、こうした仕事はできなかったと思います」と、将来を考える際、広い視野に立って見ることの大切さを勧めてくれた。

(2月24日、東京国際フォーラムにて取材)

PROFILE ●やまみち・りょうせい●

1970年東京都生まれ。
小学校からラグビーを始め、柏日体高等学校でラグビー部。88年4月健康学科入学。92年3月同学科卒業後、他社で勤め、95年(株)マクロース[前(株)マリブインターナショナル]に入社。04年6月、同社代表取締役後に就任、現在に至る。98年イタリア「ボンベア展」を東京・大阪で企画・開催。02年から「人体の不思議展」の総合企画・運営として、年間約4会場を回る現在の形態の展示を始める。05年は、東京の次は4月から京都、夏には新潟と開催が決定しており、金沢でも予定されている。

人体の不思議展
http://www.jintai.co.jp/

大学院の紹介

04

1 研究科長より 本年度の抱負

大学院研究科長 中嶋 寛之 教授
本大学院の博士後期課程(博士)からは、今春9人の課程博士と1人の論文博士が誕生しました。とりわけ、国際的な雑誌に掲載や学会誌における受賞など対外的にも高い評価の得られた研究がみられるようになったのは、大学院としての完成度が高まったことを物語ると思います。
本年度は、すでに中間発表を済ませたものが8人、また研究生のうち研究が修了し論文の作成にかかっているものが9人おります。来春には



また素晴らしい研究成果を携えた優秀な博士の誕生を期待しております。

一方、博士前期課程には、38名と例年以上に多くの合格者が認められました。とくにトレーニング科学系が半数以上の20人を占めているのが特徴的です。この背景には、アテネオリンピックにおける好成績などを追い風として、スポーツ医学の競技方向上にあることを実感させ、広く認められつつある課程へと多くの研究生が進み、着実に成果に基づいた研究体制の柱が確立されていくことが望まれます。

2 2004年度
学位取得者一覽と
修了式

本学大学院は博士前期課程と博士後期課程を配しており、本年度は34人の体育学修士および9人の体育博士の方が当該課程にて学位を取得されました。以下に論文の題目と取得者の一覽を示します。

修了式は2005年3月10日世田谷キャンパスにて行われました。本学大学院研究科長である中野昭一、名誉教授の発案により特に優秀な博士學位取得者に対して表彰を行う「中野昭一学術奨励賞」制度を設けっております。本年度は伊藤博一さん学

位論文題目:野球の投能力向上と上肢投球障害の予防に関する研究と宋洪善さん(学位論文題目: Occurrence and Recovery of Muscle Strain Injury)が学術奨励賞を受賞されました。受賞者は修了式時に学位授与とあわせて中野名誉教授より表彰を受けました。



NITTAIDA I

誌に大学院紹介が始まりまして今回で4回目を数えます。今回は研究科長より2005年度の抱負、2004年度学位取得者の一覽と修了式の様子、最後にシリーズとして連載しております「研究施設からみた大学院における研究活動」の4回目として呼気ガス分析器の紹介を行います。これらのご紹介を通じて大学院の様子を垣間見ていただければ幸いです。



中野昭一奨励賞受賞 伊藤博一さん 中野昭一奨励賞受賞 宋洪善さん

氏名	所属学系	論文題目
野口 大輔	スポーツ文化・社会科学系	日本におけるフットボールの歴史的研究 — 戦後復興期(1945-1955年)の活動に着目して —
紅林 仁	スポーツ文化・社会科学系	戦後復興期の学生体育家におけるレクリエーション教育の地位 — 学生体育の発展と学生体育の発展に寄与して —
木暮賢一郎	スポーツ文化・社会科学系	日本におけるフットボールの現状に関する一考察 — ロビイの機能性を中心に —
佐野 昌行	スポーツ文化・社会科学系	フットボールの発展と学生体育の発展に関する研究 — AIG OPENの社会的意義について —
多田 貴博	スポーツ文化・社会科学系	フットボールの発展と学生体育の発展に関する研究 — ウェルネス・スポーツと学生体育の発展を中心に —
谷登 壽徳	スポーツ文化・社会科学系	災害復興における戸籍人の振興に関する研究の一視して — 近世日本における戸籍の歴史と復興に関する研究の一視して —
中川 俊	スポーツ文化・社会科学系	公共スポーツ施設における安全管理者制度に関する研究 — 19世紀の英国におけるスポーツ観戦の安全管理に関する史的考察 — スポーツ施設における安全管理者制度 —
中西 博司	スポーツ文化・社会科学系	スポーツ文化・社会科学系
長谷部 浩	スポーツ文化・社会科学系	スポーツ文化・社会科学系
矢野 裕介	スポーツ文化・社会科学系	スポーツ文化・社会科学系
根本 有紀	トレーニング科学系	運動の近代化に関する史的考察 — 「足はまき」の形成過程に着目して —
井口 晴雄	トレーニング科学系	テニス技術の習得に関する研究 — 一般者に着目して —
伊 綾	トレーニング科学系	野球における多様な練習の効果に関する研究 — 一般者に着目して —
藤崎 結生	トレーニング科学系	フィジカルトレーニングと認知機能の発展 — 日本製のバイメカニクス材料を用いて —
小林 史明	トレーニング科学系	2次元空間における運動軌道の予測に関する研究 — 日本製のバイメカニクス材料を用いて —
下坂謙一郎	トレーニング科学系	高齢化に伴うバスケボール選手に投球動作に関する研究 — 運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 —
竹内 敦	トレーニング科学系	高齢化に伴うバスケボール選手に投球動作に関する研究 — 運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 —
対馬 豊	トレーニング科学系	認知機能と身体感覚、感情、自律神経系に与える影響について — バスケボールとトレーニングの観点から —
前田 健治	トレーニング科学系	血液凝固下における投球動作に関する研究 — トレーニングによる血液凝固下における投球動作に関する研究 —
中田 大輔	トレーニング科学系	トレーニングによる投球動作に関する研究 — トレーニングによる投球動作に関する研究 —
宮地弘太郎	トレーニング科学系	トレーニングによる投球動作に関する研究 — トレーニングによる投球動作に関する研究 —
渡辺 智樹	トレーニング科学系	トレーニングによる投球動作に関する研究 — トレーニングによる投球動作に関する研究 —
利田 武真	トレーニング科学系	トレーニングによる投球動作に関する研究 — トレーニングによる投球動作に関する研究 —
谷口 幸	トレーニング科学系	トレーニングによる投球動作に関する研究 — トレーニングによる投球動作に関する研究 —
福島 海之	トレーニング科学系	トレーニングによる投球動作に関する研究 — トレーニングによる投球動作に関する研究 —
泉田 晃秀	健康科学・スポーツ医学系	呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 — 呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 —
岡田 隆	健康科学・スポーツ医学系	呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 — 呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 —
伊藤 孝亮	健康科学・スポーツ医学系	呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 — 呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 —
酒井 秀彰	健康科学・スポーツ医学系	呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 — 呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 —
永田 和史	健康科学・スポーツ医学系	呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 — 呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 —
日浦 雅則	健康科学・スポーツ医学系	呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 — 呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 —
清水 美規	健康科学・スポーツ医学系	呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 — 呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 —
水谷 幸恵	健康科学・スポーツ医学系	呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 — 呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 —
山田 直子	健康科学・スポーツ医学系	呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 — 呼吸器の運動量と日常生活活動に関する研究 —

氏名	所属学系	論文題目
滝元 誠樹	スポーツ文化・社会科学系	「美」と「真」の両極性に関する研究 — 「古書」の分析を中心に —
古木 宏子	トレーニング科学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
伊藤 結生	トレーニング科学系	現代化・カールド改正の役割 — 運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 —
仲 立貴	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
中尾 隆光	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
西村 忍	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
伊藤 博一	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
宋 洪善	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
韓達 紀子	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —

氏名	所属学系	論文題目
滝元 誠樹	スポーツ文化・社会科学系	「美」と「真」の両極性に関する研究 — 「古書」の分析を中心に —
古木 宏子	トレーニング科学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
伊藤 結生	トレーニング科学系	現代化・カールド改正の役割 — 運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 —
仲 立貴	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
中尾 隆光	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
西村 忍	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
伊藤 博一	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
宋 洪善	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
韓達 紀子	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —

氏名	所属学系	論文題目
滝元 誠樹	スポーツ文化・社会科学系	「美」と「真」の両極性に関する研究 — 「古書」の分析を中心に —
古木 宏子	トレーニング科学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
伊藤 結生	トレーニング科学系	現代化・カールド改正の役割 — 運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 —
仲 立貴	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
中尾 隆光	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
西村 忍	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
伊藤 博一	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
宋 洪善	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
韓達 紀子	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —

氏名	所属学系	論文題目
滝元 誠樹	スポーツ文化・社会科学系	「美」と「真」の両極性に関する研究 — 「古書」の分析を中心に —
古木 宏子	トレーニング科学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
伊藤 結生	トレーニング科学系	現代化・カールド改正の役割 — 運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 —
仲 立貴	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
中尾 隆光	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
西村 忍	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
伊藤 博一	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
宋 洪善	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —
韓達 紀子	健康科学・スポーツ医学系	運動パフォーマンスの向上と投球動作の向上 — エアロビクス・自転車と運動パフォーマンス —

以下に修了者の大学院での研究活動の感想を示します。

滝元 誠樹さん

（スポーツ文化・社会科学系）
「古くは研究は似ていると思いませんか。まさに、文武両道です。一つのことを身につけるにはまず基礎作りから。より精度を高めるために行為や思考の細分化が必要で、差異のある反復も。ときには大きな壁が行為を阻むでしょう。その時こそ、質が高く十分な量をこなしていったかどか、自分の歩みの真価が問われます。そして、修了後こそが修行の始まり。ここで出たはずばらしい師と仲間を力にして次の一歩を踏み出します。」

古木 宏子さん

（トレーニング科学系）
「日体大学院の課程を終えて...」5年間の月日を費やした日体大学院生活が修了した。私は、20年前に日体大の学部を卒業している。すなわち、老けた大学院生だったのである。
大学院に入学した動機は「最近のスポーツ科学は、私が日体生だった頃とは比べものにならないほど進歩している」と痛感していたからである。しかし、大学院は、勉強や研究をする環境が整っているだけであって、自分から書物を開いたり、実験機材に触れたりしなければ、誰も何も教えてはくれないうえに、誰しも何も教えず、人生もそうであるように、人から与えてもらうことばかりを考えず、自分がスポーツを通して社会に何ができるかをしっかり持つて入学すべき

であると思う。自分のわずかな経験ではあるが、大学院の研究生活は、早期に目標を定め、集中に努めることになっていく。とても充実したものになるのではないだろうか。

伊藤 博一さん

（健康科学・スポーツ医学系）
指導教員である中嶋寛之教授は「喫煙者」をひどく嫌います。自分の健康管理もできず、このような研究者や指導者の言葉には説得力がないからです。学会発表の仕方や論文の書き方などは大学院生であれば誰もが学ぶべきことですが、一流の研究者や指導者になるためにはそれだけでは十分でないことを叩き込まれた期間であったような気がします。今後、自分の健康管理し、地道に研究活動をしていきたいと考えております。

3 研究施設からみた 大学院における研 究活動

その④ 呼気ガス分析器

大学院では日々体育・スポーツに関する研究活動が展開されています。このシリーズでは本学大学院での研究活動に頻繁に使用される機器・設備を通して本学に展開される研究活動をご紹介します。第四回は呼気ガス分析器K4b2です。

呼吸代謝分析装置 K4b2

人間は、酸素を利用して様々なエネルギーのもとになる物質を分解することによって、身体活動に必要なエネルギーを得ています。したがって、逆にとりかいた酸素を使った酸素摂取量を測ると、どのくらいエネルギーが使われたかが推定できます。疲労困憊に至るまで全身運動を行使させたときに得られる最大の酸素摂取量を最大酸素摂取量と呼びますが、これを測定することによってその人が有酸素的に作り出すことができるエネルギー量が推定でき、最大酸素摂取量が多いほど、有酸素的な能力(全身持久力)が優れていることを意味しています。また、同じ運動を行ってもより少ない酸素摂取量で運動が行える人ほど、効率がよい運動を行っているといえます。このように酸素摂取量はスポーツ活動を考える際に非常に重要な要因となります。

おわりに

本年度は9人の課程博士と1人の論文博士を本大学院から輩出することができました。高度な専門的知識と技能を身に付けた本学の修了生が国内外を問わず活躍することを確信しております。また本大学院にて研究活動を行ってみたい方は心より歓迎いたしますので本学入試広報室(電話・0357060910)まで遠慮なくお問い合わせください。

(文責:大学院研究科長室)



写真出典: 岩根文彦他「一流女子ビーチバレーボール選手の体力特性と基礎試合中の運動強度」トレーニング科学, 12(3), 153-160, 2001

平成16年度「大学・短大卒業式」「専攻科修了式」「大学院修了式」

平成17年3月10日、東京・世田谷キャンパス深沢校舎第一体育館にて平成16年度「大学・短大卒業式」が行われ、大学体育学部1,299名、短大206名に卒業証書が授与された。午後からは、741教室にて「専攻科修了式」が、引き続き「大学院修了式」が行われ、専攻科11名に修了証書が、大学院43名(前期課程34名、後期課程9名)に学位記が授与された。



平成16年度JOCスポーツ賞「トップアスリートサポート賞」優秀団体賞受賞

11月22日、都内ホテルにおいて、財団法人日本オリンピック委員会主催の「JOC感謝の集い」が開催された。その席上で、選手・指導者を取り巻く環境の整備に努め、それらの活動を積極的に支援することにより、国際競技力の向上に尽力する等、我が国の選手強化の基盤を支えている企業・学校等を表彰することを目的とした、JOCスポーツ賞「トップアスリートサポート賞」の表彰式が行われ、本学は平成16年度同賞優秀団体賞を受賞した。



平成17年度入試データ (2005.3.22現在)

Table with columns for '区別' (Division), '志願者数' (Applicants), '受験者数' (Candidates), '合格者数' (Admitted), '入学予定者数' (Enrollment), and '倍率' (Ratio). Rows include '大学/体育学部', '健康学部', '武道学部', '社会体育学部', and '合計'.

Table with columns for '区別' (Division), '志願者数' (Applicants), '受験者数' (Candidates), '合格者数' (Admitted), '入学予定者数' (Enrollment), and '倍率' (Ratio). Rows include '短大/体育科・保育科', '体育科', and '保育科'.

■大学院体育科学研究科

Table with columns for '区別' (Division), '志願者数' (Applicants), '受験者数' (Candidates), '合格者数' (Admitted), '入学予定者数' (Enrollment), and '倍率' (Ratio). Rows include 'スポーツ文化・社会科学系', 'トレーニング科学系', '健康科学・スポーツ医科学系', and '合計'.

平成16年度退職教員紹介

竹宮 隆 (たけみや たかし) 1935(昭和10)年生まれ 石川県出身 県立羽咋高校から1953年東京教育大学入学 57年卒業後、東京教育大学教務補佐員、東京女子医科大学助手、杏林大学講師、助教授、筑波大学助教授、教授を経て2001年より本学の教授として勤務。68年東京女子医科大学で博士(医学)の学位を取得。98年筑波大学名誉教授の称号を受ける。2005.3退職

中野 重人 (なかの しげと) 1937(昭和12)年生まれ 鹿児島県出身 県立牧園高校から1956年鹿児島大学入学 60年卒業後、鹿児島県立中学校教諭として勤務。67年広島大学大学院入学 69年修了後、宮崎大学助手、専任講師、助教授を経て79年より文部省、国立教育政策研究所を歴任。2000年より本学の教授として勤務。2005.3退職

富岡 元信 (とみおか もとのぶ) 1939(昭和14)年生まれ 広島県出身 広島市立舟入高校から1959年本学入学 63年卒業後、広島市立舟入高校教諭として勤務。71年本学専任講師となり、助教授を経て83年より教授として勤務。2005.3退職

園田 高一 (そのだ こういち) 1940(昭和15)年生まれ 宮崎県出身 県立都島高校から1959年本学入学 63年卒業後、本学助手、専任講師、助教授を経て87年より教授として勤務。2005.3退職

上平 雅史 (うえひら まさし) 1940(昭和15)年生まれ 奈良県出身 県立高田高校から1959年本学入学 63年卒業後、大阪市立扇町高校教諭として勤務。66年本学助手となり、専任講師、助教授を経て85年教授として勤務。2005.3退職 98年学校法人日本体育会常務理事就任

志沢 邦夫 (しざわ くにお) 1940(昭和15)年生まれ 東京都出身 都文館高校から1959年本学入学 63年卒業後、本学助手、専任講師、助教授を経て86年より教授として勤務。80年スポーツ指導者在外研究員として1年間オーストラリアへ。2005.3退職

釜崎 太 (かまさき ふとし) 1970(昭和45)年生まれ 福岡県出身 県立北九州高校から1989年本学入学 95年卒業後、筑波大学大学院入学 2001年単位取得満期退学 本学期限付助手を経て03年より助手として勤務。本学在学中、ドイツ体育大学ケルンへ留学。05年より弘前大学専任講師として勤務。

■専攻科

Table with columns: 志願者数, 受験者数, 合格者数, 入学予定者数, 倍率. Row: 11(1), 11(1), 11(1), 11(1), 1.0

■編入生

Table with columns: 志願者数, 受験者数, 合格者数, 入学予定者数, 倍率. Row: 108(101), 103(99), 98(96), 98(94), 1.1

「第15回リーダーズキャンプ」

学友会総務委員会



分科会討議風景

2月9日(水)・10日(木)の1泊2日、東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて「第15回リーダーズキャンプ」を開催した。

このリーダーズキャンプは、学友会総務委員会の運営のもと、年1回本学の学友会クラブ・サークルの代表者を集め、リーダーの育成と体育人としての意識向上を図る宿泊研修会である。

本年度のテーマは「求められる日体大とは?」。180人の学生がグループに別れ、活発な討議を行った。

- 1日目: 開会式、講演(陸上競技部 別府健至 駅伝監督)、親睦会、分科会、全体会
- 2日目: 朝会、講演(『若者の薬物乱用の現状について』警視庁 組織犯罪対策課)、分科会、全体会、閉会式

幼児体育ゼミ「小運動会」

平成16年度地域・社会貢献推進委員会



地域・社会貢献推進委員会の企画の一つとして、幼児体育ゼミの学生による「小運動会」を、平成17年2月12日(土)に東京・世田谷キャンパスで行った。

一年で一番寒い2月にも関わらず48人の子ども達と、その家族が大勢集って来て、天候にも恵まれ、広いグラウンドで仲間と、お父さん・お母さんと、お兄さん・お姉さんと「大王ころがし」、「つなひき」、「パン食い競争」などで楽しく運動した。

アテネの活躍、北京へ続け!「アテネオリンピック報告会」

平成16年10月29日、都内ホテルにおいて「アテネオリンピック報告会」が行われ、アテネからの帰国後もご多忙な日々の中、本学学生・卒業生の出場選手22名の内、12名の選手に出席いただいた。



出席者は500名を超え、開会宣言を合図に大きな歓声に包まれ選手の入場となり、最初に出場選手全22名が紹介され、長谷川正明学長の挨拶に続き、ご来賓の皆様からご祝辞を頂いた。この後、北島康介選手が昨年の世界新記録樹立で第1号として受賞した、スポーツ・学術・社会活動・国際交流等において功績のあった学生を表彰することを目的とした「特別学長賞」が、北島康介選手(2年連続)と中村礼子選手に授与された。そして12名の選手ひとり一人からアテネ五輪の感想や今後の抱負などが述べられ、在学生代表12名から花束贈呈が行われた。

最後に清水義明スポーツ局長からお礼の挨拶があり、今回の勢いが次回2008年北京オリンピックに続くようにと胡弓演奏の音色に送られながらの閉会となった。

「学内合同企業説明会」に学生300名参加!

就職課

1月15日(土)11時より、横浜・健志台キャンパス「第3体育館」において、企業38社の人事採用担当者による会社説明会が行われた。参加学生はリクルートスーツに身をかため、積極的に各社ブースを回り、人事採用担当者の方々の魅力溢れる熱弁を興味津々に聞き取っていた。



終了後、学生からのアンケートには、学内でこのような経験ができたことで、就職活動に対する意欲がわき、目的意識も高まったとの満足の声が多くあった。

「第38回 日体フェスティバル」

日体フェスティバル実行委員会



10月30日(土)より11月1日(月)まで、横浜・健志台キャンパスにおいて「第38回 日体フェスティバル」を開催した。本年度は、清原伸彦実施委員長、杉本裕行実行委員長のもと、「環・寛・歓~Let's enjoy Eco-Sports!~」をテーマに掲げた。

本学学生による和太鼓演奏で幕を開けた日体フェスティバル。シンボジウムは、アテネ五輪アーチエリー銀メダリスト山本博さん、200m背泳ぎ銅メダリストの中村礼子さん、アテネ五輪NHK総合キャスター堀尾正明さん、NPO法人グローバル・スポーツ・アライアンス常任理事の岡田達雄さん、ジャーナリストの蟹瀬誠一さんをパネラーにお迎えし、『スポーツ(アテネオリンピック)と環境』をテーマに、アテネ五輪の報告やスポーツを通じた環境問題への取り組みなど有意義な語らいの場となった。

2日目は横浜マッスルシアターで話題沸騰中の「マッスルミュージカル」を米本記念体育館で開催。本学卒業生を含むメンバーが筋肉から生まれる奇跡のパフォーマンスをたっぷりと見せてくれた。さらに9月に完成した体操競技館ではアテネ五輪体操団体金メダリストの水島寿恵選手をお迎えし、公開演技会を行なった。

最終日は学生たちのエネルギーを結集したミニ実演会を開催。すばらしい演技の数々に体育館は感動の渦となり、大迫力のエッサッサで3日間のフェスティバルを締めくくった。そのほかにも、毎年恒例になっている野外ステージでのさまざまな企画、模擬店、フリーマーケットなど、各クラブの特色を生かした公開試合や公開練習、スポーツ教室にも多くの方々に参加していただき、日体フェスティバルを開催するにあたり近隣住民の皆様をはじめ、多くの関係者にご協力いただき深く感謝したい。

